

「……『射精するまで、出られない部屋』？」

（嘘だろ……。なんで、どうして僕がこんな目に。
よりによって、同じ大学の……。ほとんど喋ったこと
もない岡本先輩と二人きりで……っ）

真っ白な部屋にある、モニターに突きつけられた
最悪な脱出条件に、僕の心臓は経験したことのない
早鐘を打ち始めた。

気づいた時にはここに閉じ込められていた。そして、
僕の隣にいたのは大学の先輩、岡本蛍介さん。
学部が同じ一個上の先輩で、その優秀さから、授業
で教授たちの話に登場することの多い人物だ。まさ
かこんな、逃げ場のない空間で向き合うことになる
なんて。

（ど、どうすれば……。先輩とはろくに話したこと
もないのに、こんな場所に閉じ込められるなんて…
…僕は射精なんてできないのに……！）

僕は全人口の約5～7%にあたる、カントボーイだ。男性性を持つが、男性器はなく、女性器を持つ。

カントボーイは性別・職業・社会階層に関係なく生まれるとされていて、役所への申告義務は必要だけれど、学校・職場への申告義務はない。

つまり本人が隠し通そうと思えば、隠せる。はず、だった。

（どうしよう。僕は絶対に無理だから、先輩になんとか射精してもらわないと……）

おそろおそろ隣の岡本先輩を盗み見ると、彼はパニックになるどころか、淡々とした様子だった。そして僕をじっと見つめていた。その温度の低い視線が、なぜか僕の体の奥をじりじりと焼くような気がする。

「……困ったね。射精しないと、扉は開かないらしい」

「え、あ、はい……そ、そうみたい、ですね……」

「出口はない。窓もない。超常現象か、悪質な悪戯か……どちらにせよ、条件をクリアしない限り、僕たちはここから出られない」

淡々と状況を分析する先輩の声には、焦りが全く感じられない。僕はただ、震える声で相槌を打つのが精一杯だった。

「……小暮くん。一つ提案があるんだけど、協力してくれるかな」

「へ……？」

（名前、僕のこと知ってる……？）

「このままずっとここにいるわけにもいかないよ」

「そ、そうですね……」

「実を言うと、僕は、自分一人じゃ処理できないタイプなんだ」

「えっ……」

（そ、それって、つまり彼女にしてもらってるってこと？ そりゃ先輩、イケメンだし……）

というか、この人は大学でも「顔がいい先輩」として他学部にも知られている人だ。

実物をこうして間近で見ると、その理由がよく分かる。均整の取れた輪郭、伏せがちな目元、無駄のない表情。視線を向けられるだけで、空気が一段静かになる感じがする。

少なくとも、僕みたいなどこにでもいる大学生とは、最初から住んでいる世界が違う。

「小暮くん？」

「……あ、すみません」

名前を呼ばれて、我に返る。心臓が、変に速く打っていた。

(なんでだろう。ただ状況を説明されてるだけなのに、この人に見られてるってだけで、落ち着かない……)

先輩はそんな僕の内心なんて知らないまま、静か

に言葉を続けた。

「だからここから出るためなんだけど」

「あ、はい……」

「もちろん、僕が射精する。後輩の小暮くんになんかすることはさせられないからね」

「えっ……いいん、ですか……」

（よかった……！）

心の底から、安堵のため息が漏れそうになるのを必死で堪えた。

（僕が、じゃなくて……先輩がしてくれるんだ）

もし「小暮くんがしろ」なんて言われていたら、僕はパニックで泣き出してしまっていたかもしれない。ああ、本当によかった……。なんて優しい人なんだろう。こんな異常な状況なのに、ちゃんと先輩として僕を気遣ってくれるなんて。

「あ……あ、ありがとうございます……！」

僕が頭を下げると、先輩は「当然だよ」と静かに言った。その声には何の感情も乗っていないように聞こえるのに、僕を見つめる瞳だけが、なぜかじっとりと熱を帯びている気がした。

「代わりに、少し協力してほしい」

「協力、ですか……？ 僕にできることなら、何でも……！」

助けてもらうんだ。僕が何もしないで、先輩だけに負担をかけるなんて申し訳ない。僕が前のめりにそう言うと、先輩は初めて、ほんの少しだけ口元を緩めた。

「……そう。何でも、してくれるんだ」

それは笑みと呼ぶにはあまりに微かで、けれど確かな悦びの色を滲ませた表情だった。先輩は一步、

僕との距離を詰める。すぐ目の前に、整った顔が迫ってきた。

「僕は、一人じゃできないんだ。……だから、小暮くんの手伝ってほしい」

「て、手伝うって……何をすれば……」

先輩の大きな手が、僕の肩にそっと置かれた。優しく、けれど逃がさないという意思を込めて。

「僕と、セックスしてほしいんだ。……小暮くん」

「は、はい……？」

真っ直ぐに、吸い込まれるような瞳で見つめられて、僕は後ずさった。けれど、この部屋はあまりに狭い。

「……僕を助けてくれるよね？ 小暮くん」

耳元で囁かれる、抑揚のない静かな声。無表情な

はずなのに、至近距離で見つめる彼の瞳の奥には、
粘りつくような執着の熱が渦巻いている。

「あ……」

声にならない吐息を漏らした瞬間、僕のうなじに
先輩の唇が触れた。

ちゅっ♡

熱い粘膜の感触が肌に張り付き、心臓が跳ねる。
先輩の手が、僕のシャツのボタンに迷いなくかかっ
た。

「お、岡本先輩……待って……っ。まだ、出口があ
るかも……あ、ッ」

（どうしよう、どうしよう……。壁まで追い詰めら
れちゃった。な、なんでこんな目に……っ！）

「出口ならさっき確認したよ。何もなかったよね。
……それとも、ずっと僕とここにいたいのか？ 僕は
それでもいいけど……」

「え、あの……」

逃げようとした僕の手首を、先輩がひょいと掴み上げた。

（男の人の手だ……。僕よりずっと大きくて、熱くて……びくともしない……。っ！）

「で、でも……。っ！ 僕、その……。普通の男とは、身体が違って……」

「知ってるよ。……。カントボーイ、なんだろう？」

「な、なんで……。っ！？ なんでそれを……。っ！」

誰にも言ったことのない、僕の体の秘密。それをこの人は、さも当然のことのように口にした。パニックになる僕を余所に、先輩は困ったように、けれどどこか楽しげに目を細めた。

「見ていればわかるよ。小暮くんって絶対個室のトイレに入るよね。それに友達に誘われてもプールは絶対断るし、泊まる流れになったらいつも緊張してた」

（こ、この人、なんでそんなに僕のこと……）

ぐいっと腰を引き寄せられ、先輩の厚い胸板に背中を密着させられる。……完全に、捕獲された。そのまま先輩がシャツの隙間から僕のお腹をスリ♡と撫で上げた。

「ひゃ……っ！？ あ……んう……っ」

這い回る指の動きが、だんだんと卑猥になっていく。お腹の奥がきゅん♡と熱くなって、ゾクゾクする感覚が背中を駆け抜けた。

「あ……っ岡本、せんぱ……や、だ……っ」

「大丈夫。僕は小暮くんを傷つけたりしない。……ほら、力を抜いて」

手がお腹から上がっていき、スリ♡スリ♡と、僕の胸の突起をシャツ越しに弄られる。その刺激がくすぐったくて、恥ずかしくて、立っていられなくなる。

「んんっ……ううん……っ」

「出られないと困るよね？ 僕は小暮くんがいないとイけないし。……なら、答えは一つだよね」

「う、あっ……」

「諦めて。……たっぷり可愛がってあげるから」

その言葉に、喉の奥が震えた。怖い。羞恥と、どこか抗えない快感に体が震える中、僕は消え入りそうな声を出した。

「うう……っ。で、でも……僕……こういうこと、初めて、で……っ」

そう。こんな特殊な体だから、誰とも付き合ったことなんてない。

僕の告白を聞いた先輩は、一瞬だけ瞳を大きく見開いて、それから……獲物を追い詰めた猛獣のような、酷く歪で、悦びに満ちた笑みを浮かべた。

「……初めて。そっか。僕が、最初なんだ」

「は、い……っ」

「……嬉しいな。なら、一生僕のことを忘れられないように、『責任』を持って刻み込んであげるからね♡」

（え……？　なんで、そんなに嬉しそうなの……？
先輩の目が……さっきよりずっと暗くて、熱い気がする……っ！）

「安心して？　小暮くんの全部、僕が優しく壊してあげるから♡」

「ひいっ……」

先輩の瞳が、どろりとした執着の色に染まる。向けられたことのない、剥き出しの独占欲。その熱にあてられて、僕の体の芯は、もう自分の意志では止められないほどゾクゾクと震え上がっていた。

「や……ぼ、僕は……そんな……っ、岡本先輩、やめ……っんんんんん……ッッ！」

拒絶の言葉を飲み込もうとした瞬間、不意に唇を